

なぜ、足立区の学力テストで不正行為や「障害」児排除は起きたのか

足立区でおきたこと

東京都足立区が独自に実施している全児童・生徒対象の学力テストで、不正行為や「障害」児の排除が行われていたことが発覚した。

ある小学校では、校長と教諭が児童の誤った解答を指さして気づかせたり、採点から普通級に通う「障害」児を除くことまで行っていた。

他の学校でも、禁止されている前年度の問題を使った練習が行われていたと報じられている。

「教育の本質を見誤った『点数至上主義』」と、全国から指弾されたのも当然である。

この不正は、例外的なものだったのだろうか？

残念ながら私の知る限り、教育関係者は一様に「やはり起きたか」「だから言わないことではない」と語る。この事態は、かねて予見されていたのである。

学力テストの成績公表がもたらすもの

私は、学習状況を調査するテストそのものを否定するつもりはない。いま、「学力低下」が実態をふまえない印象だけで論議されている。ならば一定の調査を行い、客観的な事実に基づいた論議こそ必要である。ただし、それには匿名の抽出調査で足りる。学校の実名や、まして順位を公表するのは有害無益でしかない。

下の表をご覧ください。

平均到達度順	学校名	19年度	参考18年度
	足立区全体	153.2	162.3
1	■■■■小学校	171.6	166.8
2	■■■■小学校	165.2	172.9
3	■■■■小学校	164.8	183.9
4	■■■■小学校	164.6	174.4
5	■■■■小学校	164.4	166.4
6	■■■■小学校	163.9	170.6
7	■■■■小学校	163.5	171.2
8	■■■■小学校	163.4	168.2

これは足立区がホームページで公開している、区立

の小・中学校の学力テストの成績と順位の一覧である。この紙面では学校名を伏せたが、実際のホームページには学校の実名が公表されている。

足立では学区は「自由化」されて、「学校選択制」が取り入れられている。保護者は当然、この一覧を判断の材料とするだろう。

これではいかに足立区教委が「成績は判断材料のひとつにすぎない」と主張しようと、成績が至上のものとして一人歩きをはじめるのは想像に難くない。

さらに追い打ちをかけたのが、昨年の秋に足立区が導入を公表した足立版「教育パウチャー制度」だ。これは、成績の良かった学校に予算を厚く配分し、成績の悪かった学校の予算を削減する、という制度だ。

教育条件が厳しいからこそ、そこに予算を手厚く配分する、というのならわかる。しかし、「成績が悪いのは、すべて教師や子どもが努力しないからだ」というのであれば、およそ現場を知らない暴論でしかない。

さすがにこの提案は批判をあびて撤回されたが、足立区では、現在も教育予算の傾斜配分が行われており、「学習成績もその判断材料のひとつ」である。

こんな手法をとれば、どのようなことがおきるか。

今回の不正行為や「障害」児の排除は、起こるべくして起きたというしかない。

足立区教育委員会に聞く

私はこの8月、足立区を訪れた。報道されていることが事実かどうか、その現実を知りたかったからだ。

対応してくれたのはYさんの名刺には、「学力向上推進室」と書かれていた。足立区の教育の中心課題は、「学力向上」なのだ、ということがよくわかる。

竹村 「足立区教委では、そもそも『学力』を、どのようにとらえていらっしゃるのですか？」

Y室長「成績がすべてとは思いませんが、現実に学歴社会は存在しています。成績も無視できません」

竹村 「成績がふるわない学校があったとしても、それは教師や生徒が『努力をしていない』からでしょうか。経済的な格差や、教育条件も無視できないのではありませんか？」

Y室長 「裕福なご家庭でも成績のふるわないお子さんもいます。その逆もあります。教育条件と成績とは別です」

竹村 「今回の事件の背景をどう考えていますか？」

Y室長 「報道されているような、学力向上策が原因だとは思いません。今回の事例は、あくまで1校だけの例です。それだけで、足立の教育がすべて間違っているように言われるのは心外です」

竹村 「足立区の子どもたちは、足立の教育方針をどう思っているのでしょうか？」

Y室長 「子どもに評判が悪くても、必要なことをしてあげるのが教育でしょう。問題だという声は、ごく一部をのぞいてありません」

竹村 「現場の先生たちの意見はいかがですか。」

Y室長 「各学校では主旨をご理解いただいていると思います。教員からの批判は特に聞いていません」

教育の中心は子どもたちである。しかしY室長の口からは、足立の子どもの姿は浮かんでこなかった。

学校には勉強のできる子もいれば、苦手な子もいる。元気な子もいれば、悩みを抱えた子もいる。さまざまな子どもたちが、ともに学ぶ場が学校のはずだ。

そこに「成績」というひとつの物差しだけが幅をきかせ始めたとき、学校はどうなってしまうのだろう。

足立の子どもたちは、学校を「たのしい」と感じているのだろうか？

象徴的だったのは、足立区教委のパンフレットに書かれていた「登校拒否などの問題行動」という表現だ。

足立では、登校拒否は「問題行動」なのだ。「学校に行きたくない」と言い出した子どもの声に、足立区教委は耳を傾けようとしなかったのだろうか。

足立だけを責めればよいのだろうか？

でも、と、私は思う。足立区だけを責めればよいのだろうか、と。

そもそも東京都教委自身が、都内の各区・市ごとの学力テストの成績を公表しているのだ。そして、足立区はその中ではつねに下位に位置する。

こういう構造の中で、足立区は「学力向上」のプレッシャーに、厳しくさらされつづけてきたのだろう。

足立区の所得水準は都内ではもっとも厳しく、生活保護や準保護の児童・生徒の比率は4割にも及ぶ。

(ちなみに藤沢は平均で15%ほどである)

学校によっては、7割の生徒が教育扶助を受けているという。交通費をかけて「成績上位」校に通える生徒は去り、生活に余裕のない家庭の子どもたちは残る。学区「自由化」のひとつの帰結が、格差の拡大だ。

そんな足立の現実を知っていれば、「教育パウチャー」が馴染まないことは自明ではないか。

足立区は、東京の下町だ。下町ならではの暖かさや、助け合いこそが個性であり、良さではなかったのか。そんな下町の個性を足立の教育の個性として、地域にねざした学校づくりを進めていけば、とても魅力ある学校が生まれるはずなのに……

しかし、それを許さない時流のなかで、もっとも矛盾の集中する足立がもがき苦しんだあげくの不正行為。足立もまた、競争主義の犠牲者だったのではないか？

当該校の校長や教諭は処分されるという。しかし、真に批判されるべきなのは、現場を知らない者たちが進める非現実的な「教育カイカク」ではないのか？

足立区役所からの帰り、電車の車窓から、夕日をあびた中学校が見えた。そこには、「夜間学級生募集」と書かれた看板があった。

様々な理由で学校に行けなかった方たちのために、足立区は特別に予算を措置して夜間中学を設置してきた。この姿勢は、どこに行ってしまったのだろう……私の心は重かった。

「学区自由化」を行わず、地域の学校づくりを進める世田谷区

世田谷区は、東京23区の大半が「学区選択制(学区自由化)」を導入する中であって、数少ない「学区は自由化しない」ことを方針化している区である。平成17年に制定された「せたがや教育ビジョン」では、学校・家庭・地域の連携による「地域の学校」をめざす、ということを方針化している。

「競争主義では、学校不信が生まれます。世田谷ではすべての学校が地域から信頼されることをめざして努力しています」と、世田谷区教委の担当者は語る。これとて、けっして簡単なことではない。

「子どもたち」という言葉が、さかんに語られていたことが私には印象的だった。